

制約や専門性の違いもあるため、心理面のケアや援助という点で困難を生ずる場合がある。そこを①～③のようなアプローチを中心にして補うことで診療や治療が効果的に進むよう働きかけることが、臨床心理士の役割であったと考える。

18 当院における肝臓病教室への取り組みと直面している問題点

宮崎 知子・亀井 広美・富樫 啓子
 浦沢 成江・有賀 諭生*・吉川 成一*
 山川 雅史*・津端 俊介*・平野 正明*
 県立中央病院内科外来
 同 内科*

【目的・背景】当院における肝臓病教室の、これまでの取り組み・成果と直面している問題点について報告する。

【教室構成と理念】8職種29名で運営している。共通目標は「肝疾患患者のQOL向上」、運営理念は「参加者同士または参加者と医療者を繋ぐ貴重な場」「日常業務と教室とをフィードバックする機会」である。これらに向けて職種ごとに独自の目標を掲げ活動している。

【取り組み・成果】懇親会や休憩時間を、参加者同士または参加者と医療者との交流の場として重要視している。ここでの交流を通して患者のニーズを拾い上げ、日常の診療や患者指導、各職種の連携に反映させている。

【問題点】若年層の参加者が少ない。スタッフの中にあるマンネリ化。病院側の協力が得にくく院内での活動や学術活動に限界がある。

【結語】肝臓病教室は、日常診療において患者と医療者を繋ぐための重要なツールとして確立している。今後、院内のみでなく地域との連携も視野に活動を展開したい。

19 若年者B型慢性肝炎に対するIFN治療の当院における現状

長島 藍子・石川 達・堀米 亮子
 阿部 寛幸・廣瀬 奏恵・窪田 智之
 富樫 忠之・関 慶一・本間 照
 吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

【目的】当科における若年者B型慢性肝炎に対するIFN治療の成績からB型慢性肝炎におけるIFNの意義について検討する。

【方法】対象はB型慢性肝炎と診断され、IFN治療を行った7症例で、年齢は20～34歳、男女比は4対3、genotype Cが5例、genotype A, Dがそれぞれ1例であった。治療前のHBV-DNA量は5例が7 log copies/mL以上（高値群）、2例が7 log copies/mL未満（低値群）であった。IFN治療前後でのHBV-DNA量、ALT値について検証した。

【成績】高値群はIFN投与中、投与後共にHBV-DNA量の低下はほとんど認めなかった。低値群では投与終了12ヶ月後まで、HBV-DNA量は低値を維持できたが陰性化は得られなかった。genotype Aの症例においてもVRは得られなかった。ALT値は治療後6ヶ月の時点でBRとなったものは1例であった。

【結論】35歳未満のB型慢性肝炎への治療はIFN治療が推奨されているが、既存のIFN療法での治療効果は十分とはいえなかった。現在PEG-IFN製剤が保険適応となり、成績向上に貢献し得るかの検討は必要である。核酸アナログ製剤(NA)の中止基準が確立されつつある現在は、若年者でもNAとの併用によって治療効果を発揮させ、Drug freeに持ち込むことができるかを含め、IFNの意義を再検討していきたい。